

それでも頑張つて田圃を造り、田植えは竹のヘラで一本々々穴を開けながら苗を植え込んでいく。それでも秋には四反で十二俵の収穫があった。

再び冬がしのび寄る。私は意を決して、神戸の叔父を頼つて家を後にすることにした。「夜学に通いたい」父は黙つて一つの竹行李を買い求めてきて、フタの裏に「男子立志出郷関」と書いた。

製鉄所の寮に着いた時、ポケットには七円あまり、でも給料は良い、仕送りもできる。仕事は八百度の高熱で燃える炉の前で鉱石を投げ入れる、まさに男のために生まれたような作業、時おり肋間神経痛が起きるが休むことはない。

母も病院の附添婦として勤めることになったと明るい知らせが届く。

妹も寂しいだろうが、もう少しの辛抱だ。

十五歳の暮、神戸の街は暖かく、除夜の鐘が終るまで書き綴つた日記の終りに、「努力は天才に優る」と気負つて書いた。

縦断爆撃と戦後の苦勞

東京都 木村 楠 男

昭和十九年夏だつたと思うのだが、疎開先より台北市内へ行き、爆撃を受け、五分早くその場を離れたために命拾いをしたことがあった。その日太陽は落ち、闇がまわりを包み始めた頃、台北市の方角から一本の火柱があがつた。大きな火柱が。それが合図かのように、両端から真ん中へ向かつて、次から次へと火柱が立ち始めた。大きな花火のような火柱だつた。その頃良く云われていた縦断爆撃かもしれない。土手の上から台北市を眺め、暗闇に映える炎をきれいだなと思い、何も普通の家を焼くことはないじゃないか、と複雑な気持ちで立ちつくしていたことを、はつきりと覚えてゐる。

昭和二十一年三月、引揚げのため爆撃の傷まだ癒えぬ台湾総督府に集結、四月初めに和歌山の田辺港に上

陸、祖国上陸後のおにぎりは、もち米で握ったおにぎりではないかと思つたほどねばりのあるおいしいおにぎりだった。船内の食事は、乾燥キャベツ入りの味噌汁と高粱のまじったおにぎりだけでしたから。

父母の郷里、宮崎県の田舎へ帰つたためか、東京等の都会へ引揚げた人びとに比べると、食に関しては多少は恵まれていたと思う。田舎にもララ物資は来ました。初めて知つたバターピーナツの缶詰、どんな食べ方をしたら良いかわからない缶詰、油を絞つた大豆カスの固まり。牛や馬じゃないんだと思ひながら空腹の胃袋に詰め込み、飢えに堪えた日々。でもララ救援物資で助かった人びとも多く、感謝をせねば……複雑な気持ち。

田舎で米を作りながらギンシャリが食えず、芋、南瓜、豆等を入れたご飯、おかゆ。

学校は小六年に編入。中には引揚者だと言つてイジめる者もいた。「台湾人じゃないか」「お前達余計者が来たために、村に住む人間の食料事情が悪くなった。早くよそへ行け」そう言つてイジめる子供達もいたが、

長くは続かなかつた。殴られたら殴りかえすし、台北での教育水準が高かつたためか、直ぐトップになった。友達も出来、イジメもなくなつたが、母に早く亡くなられたことはひじょうに辛かつた。戦争に負けなければ、母は死ぬことがなかつただろうに。今考えても悔しい思いが先に立つ。

弟や妹の面倒を見（幼い妹は一年ほど親戚に預けたが）衣類のはころびを縫いつけたり、下駄の緒を作つたり、現在ならヘルシーだといつて喜ばれるだろう肉なし野菜入りのカレーライスをこしらえたり。現在なら膝の抜けた、又破れたジーンズは、一種のファッションかもしれないが、その頃は膝あてにする生地も無い時代だった。

あの当時は、日本の人びとは大なり、小なりの苦勞を重ねていたことと思う。私の通つてきた戦後の道はあたりまえのことなのかも知れないと、それほど苦勞ではなかつたのではないかと、私は思うことがあります。父がそれを私達に感じさせない努力があつたためであり、父の苦勞は大変だつたのではないかと、父を

亡くしてから思うようになった。父は苦勞話をするこ
とは、あまりなかったが父の姿を見て育ってきたため、
おぼろげながらその大変さが思い出される。

引揚げては見たものの、会社勤務は出来ず、慣れな
い魚屋（鮮魚等を自転車に積んでの行商）等をやった
り、和歌山の梅の実の販売をして（梅の実はずう黄色
くなり商売としてはむずかしかったようだ。現在のよ
うに運送手段が発達していないため）大きな借金を負
い、それが長い間、足を引っ張ることとなった。

何度か職を変え、どうにか我々兄妹三人の高校卒業
を見るまでは苦勞し、大変なことだった。母が生存し
ておれば気分的にも、又家庭内のことでも楽ではな
かった。

人生には運、不運があり、苦勞する人、しない人、
あるけれど、敗戦後の日本人は、大多数の人びとが苦
勞し、（一部の人は闇、又は不正で、もうけた者もい
たが）頑張り抜いて生きてきたことを心からよろこ
びたいと思う。

”母子家族“

東京都 砂 口 禮 助

戦後、日本人は台湾から引揚げなければならなくな
った。家はもちろんのこと、家財道具一切を放棄しな
ければならない。

父は香港陥落の前日、病で亡くなり、兄は予科練に
入隊していたので、私達は軍人の家族として、早く日
本へ引揚げることが出来た。

二十歳の姉、十五歳の私、下に弟と妹二人、五人姉
弟の母子家族、父がいれば準備は手早く出来たであろ
うが、一応持ち帰る物の用意が出来た頃、“二日後に
集合せよ”という知らせがあった。当日の朝、私達は
人力車を呼び、乗りこむと、どこからともなく現われ
た中国兵が「接收」という赤紙を玄関に封印してしま
った。悔しいというか、情無いというのか、じっとた
えてうしろも振りかえらず、わが家を去った。